岡山大学経済学会雑誌 53（3），2022，173 ～ 188

《研究ノート》

# 斎藤幸平著『大洪水の前に』と『人新世の「資本論」』によせて[1)]

太　田　仁　樹
（岡山大学名誉教授）

社会思想史学会第46回大会（2021年10月30日　オンライン開催）のセッション「18・19世紀のドイツの社会経済思想」において，斎藤幸平氏の『人新世の「資本論」』（斎藤［2020］，以下『人新世』と略記）についての批評をせよとの御依頼が，世話人の原田哲史氏と大塚雄太氏からありました。以下はその依頼の内容です。

> 2018年に*Karl Marx's Ecosocialism: Capital, Nature, and the Unfinished Critique of Political Economy*（原書2017年，邦訳『大洪水の前に――マルクスと惑星の物質代謝』2019年）でもってドイッチャー記念賞を受賞した斎藤によるこのたびの本書では，気候変動・脱成長といった現代的状況の把握と「脱成長コミュニズム」という目指すべき経済システムとが前面に押し出されているものの，その第４章では，マルクスの経済思想について後期での転換の意味を分析しつつ論じられている。本報告では，先の*Karl Marx's Ecosocialism*にも触れつつ，本書における著者のマルクス再解釈とその現代的意味の提起について評したい。

本稿では，『人新世』の第４章を中心に，適宜『大洪水の前に：マルクスと惑星の物質代謝』（斎藤［2019］，以下『大洪水』と略記）にも言及しつつ，斎藤氏のマルクス理解について検討をしていこうと思います。

## １．『人新世』でのマルクスの思想的展開：第１期――「生産力至上主義」

『人新世』の第４章は，マルクスの思想的発展の諸時期についてのまとまった見通しを提示しています。

図：マルクスが目指していたもの

| | | 経済成長 | 持続可能性 |
|---|---|---|---|
| 1840<br>～<br>1850年代 | 生産力至上主義<br>『共産党宣言』<br>「インド評論」 | ○ | × |
| 1860年代 | エコ社会主義<br>『資本論』第１巻 | ○ | ○ |
| 1870<br>～<br>1880年代 | 脱成長的コミュニズム<br>『ゴータ綱領批判』<br>「ザスーリチへの手紙」 | × | ○ |

（『人新世』197，図17）

1）本稿は，2021年10月30日にオンライン開催された「社会思想史学会第46回大会」で開催されたセッション「18・19世紀のドイツの社会経済思想」において，報告者としておこなった書評報告を文章化したものです。セッションの世話人である原田哲史氏と大塚雄太氏には準備過程からおせわになりました。また，当日の会場では，書評対象となった御著作の著者である斎藤幸平氏および討論に参加された方々から御教示を得ることができました。記して謝意を表します。

それを図示したのが197頁の図17です。まずこの図とそれについての斎藤氏の説明を見てみましょう。

第１期は，1840年代と50年代，マルクスの20歳代と30歳代です。斎藤氏はこの時期のマルクスの歴史観を「進歩史観」と呼び，この時期のマルクスの思想を「生産力至上主義」とか「ヨーロッパ中心主義」というタームを用いて特徴づけています（『人新世』153）。この「生産力至上主義」の時期のマルクスは，1848年革命の失敗と，1857年の恐慌の克服によって，壁にぶつかることになります。これによって，マルクスは資本主義認識の修正を迫られることになります。

> 引用１ まだ若かった当時のマルクスは，資本主義が早晩，経済恐慌をきっかけとした社会主義革命によって乗り越えられるという楽観論を抱いていた。資本主義の発展は生産力の上昇と過剰生産恐慌によって革命を準備してくれる。だから社会主義を打ち立てるために，資本主義の下でどんどん発展させる必要があると考えていた節がある。いわゆる「生産力至上主義」である。／ところが，1848年革命は失敗に終わってしまう。資本主義は息を吹き返した。1857年の恐慌のときも同じだった。恐慌を繰り返し乗り越える資本主義の強靭さに直面するなかで，マルクスは自らの認識を修正するようになる。（『人新世』150）

この時期のマルクスの思想を端的に示すものとして，斎藤氏は『共産党宣言』から以下の章句を引用しています。

> 引用２ ブルジョアジーはその100年足らずの階級支配のあいだに，過去のすべての世代をあわせたよりはるかに大規模で巨大な生産力をつくりだした。自然の諸力の征服，機械の発明，工業と農業への化学の応用，蒸気船，鉄道，電話，いくつもの大陸の開墾，巨大運河の建設，地から湧き出てきたような膨大な住民群－これほどの生産力が社会的労働の胎内で眠っていようとは，これまでのどの世紀が予想しただろうか？（『全集』第４巻480,『人新世』154-155）

「生産力至上主義」という呼称は，斎藤氏のオリジナルなものではなく，マルクス批判者によって用いられているという意味で「いわゆる」と修飾語がつけられています。ここでは，「進歩史観」,「生産力至上主義」,「ヨーロッパ中心主義」が，セットで捉えられていることに注意しておきましょう。

## ２．『人新世』でのマルクスの思想的展開：第２期――「エコ社会主義」

マルクスの思想的発展の第２期は，「エコ社会主義」と呼ばれます。マルクスは40歳代で，『資本論』第１巻発行は1867年です。この時期のマルクスについて，斎藤氏は次のように述べています。

> 引用３ 資本主義での生産力上昇を追求するのではなく，先に別の経済システム，すなわち社会主義に移行して，その下で持続可能な経済成長を求めるべきだとマルクスは考えるようになったのだ。これが，『資本論』第１巻刊行前後の時期に，マルクスの抱いていた「エコ社会主義」のビジョンである。（『人新世』165）

『宣言』の時期（第１期）と『資本論』の時期（第２期）の差異についての，斎藤氏の記述は誤解を招

くものであると言わざるを得ません。『宣言』のマルクスが，資本主義の下での生産力上昇を「追求」していたという解釈は妥当なものではありません。マルクスが目指したのは，プロレタリアートによる権力の獲得であり，社会主義への前進です。社会主義（あるいは「共産主義の第１段階」）という「別の経済システム」の下での「経済成長」を目指したという点では,『ドイツ・イデオロギー』（1846年）から『ゴータ綱領批判』（1875年）まで，マルクスは一貫していました。この点では，斎藤氏が第１期と第２期の差異について殊更に言い立てているのは，筋違いでしょう。

それはともかく,斎藤氏は第２期のマルクスの思想が内包する重大問題を指摘します。それは第２期が，第１期を特徴づけた「進歩史観」や「ヨーロッパ中心主義」を継承するものであったという問題です。『資本論』第１巻の「序文」の,「産業のより発達した国は，発展の遅れた国にたいして，ほかならぬその国自身の未来の姿を示している」（『全集』第23巻９，『人新世』167）という章句がそれを示しています。斎藤氏はこの言い方について次のように指摘します。

> 引用４ このような単線的な進歩史観は,いかにもヨーロッパ中心主義的である。自分たちヨーロッパ人の歴史を世界の残りの部分に勝手に投影してしまっているように見える。（『人新世』167）

マルクスの「ヨーロッパ中心主義」を批判したのが，サイード（Said［1978］）のマルクス批判でした。斎藤氏は1850年代のマルクスのインド論を批判するサイードを引用した上で，サイードのマルクス批判に賛同します。

> 引用５ アジア社会はそれ自体では，静的で，受動的なため,「まったく歴史をもたない」。だから，イギリスのような資本主義の国が外から介入して，歴史を推し進める必要があると言うのである。ここにはサイードの指摘する，オリエンタリスト的な考えが姿を見せている。／これでは，歴史発展の過程で発生する人々の苦しみを，人類史的な観点から必要悪としてマルクスが正当化しているかのようである。（『人新世』170）

サイードによる「オリエンタリスト」であったというマルクス非難について，第１期と第２期を通してそうであったことを，斎藤氏自身が認めていることは注目すべきです。斎藤氏にとって，第２期までのマルクス全体が批判すべき対象であり，また，マルクス自身がこの時期の末期にようやくそのような認識を脱却していったというのです。『宣言』や「インド論」のマルクスだけでなく,『経済学批判』や『資本論』という,「唯物史観」といわれるマルクスの世界認識の骨格が展開されているとされてきた諸文献を含めて1868年以前のマルクスが全体として批判にさらされることになります。

転機は1868年に訪れます。斎藤氏は,『資本論』第１巻出版以降，1868年の思想的転換に注目します。マルクスの思想は，実質的には，1868年以降の「晩年マルクス」とそれ以前の「壮年期マルクス」の二つの時期に分けられ，斎藤氏は「壮年期マルクス」を丸ごと批判すべき対象とみなし,「晩年マルクス」を，ようやく掬い上げるべき価値のあるものと評価します。このような時期区分は,『大洪水』とはまったく異なったものです。

> 引用６ マルクスの資本主義批判は，第１巻刊行後の1868年以降に，続巻を完成させようとする苦悶のなかで，さらに深まっていった‥‥。いや，それどころか，理論的な大転換を遂げていったの

である。そして，わたしたちが「人新世」の環境危機を生き延びるためには，まさに，この時期のマルクスの思索からこそ学ぶべきものがあるのだ。しかし，この大転換は，現行の『資本論』からは読み取ることはできない。(『人新世』151)

引用７ MEGAの新資料研究から明らかになったことだが，後にマルクスは，自らのオリエンタリズムを深く反省するようになったのだ。ここでも決定的な変化は『資本論』刊行直後の1868年以降に訪れている。／実は, 1868年以降, マルクスは自然科学のエコロジーの研究に取り組むようになっただけでなく，非西欧や資本主義以前の共同体社会の研究にも大きなエネルギーを割くようになっていったのだ。(『人新世』171)

## ３．『大洪水』と『人新世』におけるマルクス理解の差異

斎藤氏の前作『大洪水』は，エコロジーの観点から，マルクスの思想的発展を跡づけて，従来の理解を超えるマルクス像を提示したものとして高く評価されています。特にMEGAの第４部の「抜粋ノート」の分析によって，リービッヒとフラースのマルクスに与えたインパクトの差異を摘出した点は，大きな功績であると認められています（崎山［2021］)。その意味で，エコロジーの観点から唯物史観の深化・豊富化を試みたフォスター（Foster［2000］）の作業をさらに一歩推し進める作業であったとも言ってもよいでしょう。

『大洪水』では，『人新世』におけるような３期区分はおこなわれていません。『大洪水』における斎藤氏の見解によれば，マルクスはその思想的生涯の出発点から，抽象的ながらエコロジーの観点を保持していたとされます。この点は，『人新世』における認識と顕著な相違を見せています。そもそも『人新世』の時期区分によれば，第１期のマルクスには，「持続可能性」＝エコロジーの観点が欠如していたのです。第２期のマルクスが，リービッヒの『農芸化学』第７版における「略奪農業」批判によって眼を開かれたのは1865年のことでした（『人新世』156)。

それに対し，『大洪水』では，エコロジーの観点は初期からマルクスのなかに一貫して存在していたと見なされています。1844年の『パリ・ノート』(「経済学・哲学手稿」）からの以下の引用が，それを示しています。

引用８ 人間的自己疎外としての私的所有の積極的な廃棄，したがってまた人間による，また人間のための人間的本質の現実的取得としての共産主義。‥‥この共産主義は完成した自然主義として人間主義に等しく〔Naturalismus＝Humanismus〕，完成された人間主義として自然主義に等しく〔Humanismus＝Naturalismus〕，人間と自然との，また人間と人間との間の対立の真の解消，存在と本質とのあいだの，人間と自然との，また人間と人間とのあいだの対立の真の解消，存在と本質とのあいだの，対象化と自己確証とのあいだの，自由と必然とのあいだの，個と類とのあいだの，抗争の真の解消である。(『全集』第40巻457，『大洪水』50-51)

この引用に続けて，「さらに注目すべきは，マルクスと自然の統一という1844年の洞察を『資本論』に至るまで堅持していたという事実である」(『大洪水』51)，と斎藤氏は述べています。その初期以来，マルクスが人間と自然の関係の「理性的」再編を課題とし，貫徹された「人間主義＝自然主義」として，共産主義の理念を構想していたというのが，『大洪水』の理解です。エコロジーの観点は，抽象的ながら初

期マルクスにすでにきざしていたのです。『ドイツ・イデオロギー』以降のマルクスは，このようなエコロジー的な観点の抽象性を克服する営為をおこなっていたと言うのです。

> 引用9 マルクスの物質代謝論は，『パリ・ノート』の抽象的な「人間と自然の弁証法」にとどまっていたわけではない。つまり，「素材」とは人間との関係なく存在し，自然の本質であるようなロマン主義的な理念ではない。むしろ，『ド・イデ』以降のマルクスは，そうした非歴史的な人間と自然の関係を存在論的に扱う立場を徹底して退け，資本主義的形態規定との関連で物質代謝の包摂を分析しようとしていた。したがって，マルクスの経済学批判にとっての中心的な問いは，「労働過程が資本の元でのその包摂によってどれだけ変化を被るか」という問題だったのだ。つまり，資本の物象化のもとで被る労働過程の変容と，そこから生じる人間と自然の物質代謝の亀裂を分析するのが，『資本論』なのである。（『大洪水』110）

『大洪水』では，『資本論』の時期のマルクスの立場として，「エコ社会主義」というタームが肯定的な意味で使われていることも注目すべきです（『大洪水』256）。「資本の物象化のもとで被る労働過程の変容と，そこから生じる人間と自然の物質代謝の亀裂」の分析は，現行の『資本論』では十分に読み取ることができない，それを明らかにするところにMEGA研究の意義がある。すなわち，「エコ社会主義的傾向」の内実を明らかにすることこそが，MEGA研究の課題であるということです。

これに対して，『人新世』の斎藤氏は，『資本論』における「エコ社会主義的傾向」は克服されるものと評価しています。『人新世』においては，第１・第２期のマルクスは，「進歩史観」で，生産力主義（斎藤氏の表現では「生産力至上主義」）で，「ヨーロッパ中心主義」であったと非難されています。第２期の「エコ社会主義」と言っても，「進歩史観」によって不十分なものにとどまらざるをえなかったと，「進歩史観」が非難を浴びています。『大洪水』の「エコ社会主義」に代わって，『人新世』の斎藤氏が称揚するのは，「脱成長的コミュニズム」です。マルクスのこの転換の軸となったのは，「定常型経済」の原理の獲得です。それによって「進歩史観」，「生産力至上主義」と「ヨーロッパ中心主義」も完全に克服されると言うのです。

## ４．『人新世』でのマルクスの思想的転換：「ザスーリチへの手紙・草稿」等

斎藤氏によれば，晩年のマルクスの思想的転換は，「ザスーリチへの手紙・草稿」（1881）と「『共産党宣言』ロシア語版第２版への序文」（1882）において端的に示されているとされます。

1881年，マルクスは，ロシアの著名なナロードニキ革命家ヴェーラ・ザスーリチへの手紙において，『資本論』で論述されている資本主義化の運動の「歴史的宿命性」は，西ヨーロッパ諸国に限定されているので，ロシアの共同体の生命力についての判断を下すことはできないと『資本論』の叙述の妥当範囲を限定しています。斎藤氏はこのマルクスの「ザスーリチへの手紙」を重視します。「この手紙にはマルクスの思想的到達点が秘められているといっても過言ではないとし（『人新世』173），さらに，次のように述べています。

> 引用10 この［ザスーリチへの］返信については，よく知られている。『資本論』における歴史分析は，あくまでも「西ヨーロッパに限定されている」とマルクスははっきり述べるのだ。近代化を推し進めることで，わざわざロシアに残っている共同体を破壊してしまう必要はない。むしろ，ロシ

アにおいては，これらの共同体が，拡張を続けて世界中を呑み込もうとする資本主義に対する抵抗の重要な拠点になる。共同体を「その現在の基礎のうえで」，西欧の資本主義がもたらした肯定的な成果を摂取しながら発展させていくことが，コミュニズムを実現するためのチャンスになるとマルクスは書いている。／‥‥最晩年のマルクスが，単線的な歴史観とヨーロッパ中心主義から決別していたことは，明らかである。（『人新世』174-175）

マルクスとエンゲルスは，「『共産党宣言』ロシア語版第２版への序文」（1882）においても，ロシアにおける資本主義の発展傾向と共同体の運命について発言をしています。斎藤氏は，この「序文」から「もし，ロシア革命が西欧のプロレタリア革命にたいする合図となって，両者がたがいに補いあうならば，現在のロシアにおける土地の共同所有はコミュニズム的発展の出発点となることができる」（『全集』第19巻288）との章句を引用したうえで，次のような判断が示しています。

引用11 この「序文」では，ロシアの共同体が，資本主義的発展を経由しなくてよいどころか，コミュニズム的発展を西欧よりも先に――その後，西欧の革命によって補完される必要があるとしても――開始することができると，はっきりと述べられている。マルクスの歴史観が大きく変わっているのは，もはや否定できない。（『人新世』176）

マルクスの思想的発展をここまで概観してきたうえで，斎藤氏が特に重視するのは，「ザスーリチへの手紙」の「草稿」である。斎藤氏は「草稿」の意義について次のように結論づけている。

引用12 晩年のマルクスは進歩史観を捨てたが，それを可能にしたのは，1868年以降の自然科学研究と共同体研究であった。両方の研究が密接に関連しているのをしっかりと踏まえることで，晩期マルクスの到達点である「ザスーリチ宛の手紙」のもつ理論的意義もはじめて理解できるようになるのである。／つまり，自然科学と共同体社会を研究することで，「持続可能性」と「平等」の関連について，マルクスは考察を深めようとした。そして「ザスーリチ宛の手紙」を何度も書き直しながら，将来社会が目指すべき，新しい合理性の姿を展開しようと試みていたのである。要するに，ロシア人からの質問をきっかけに，持続可能で，平等な西欧社会を実現するための展望を，マルクスは構想し直そうとしていたのだ。（『人新世』191-192）

斎藤氏は，「草稿」の中でも，特に以下のマルクスの諸章句に注目します。

引用13 新しい共同体が自分の原型（＝農耕共同体）からいくつかの特徴を引き継いでいるおかげで，この共同体は，全中世を通じて民衆的自由と生活の唯一のかまど「根源」となっていた。
（『全集』19，403，『人新世』185）

引用14 ［資本主義の］危機は，資本主義制度の消滅によって終結し，また近代社会が，最も原古的な類型のより高次の形態である集団的な生産および領有へと復帰することによって終結するであろう。（『全集』19，393，『人新世』191）

上記の引用を踏まえて，未来を切り開く共同体の持つポテンシャルについて，斎藤氏は次のように述べています。

引用15 共同体社会の定常性こそが，植民地主義支配に対しての抵抗力となり，さらには資本の力を打ち破って，コミュニズムを打ち立てることさえも可能にすると，最晩年のマルクスは主張しているのである。ここには，明らかに大きな転換がある。共同体は能動的に抵抗し，コミュニズムという歴史を作る力を有しているというのだ。ここには1850年代とはまったく違う，定常型経済についての肯定的な認識が存在している。／このような共同体社会がもつポテンシャルの認識を可能にしたのが，晩年のエコロジー研究なのだ。つまり，持続可能性へのマルクスの関心が，50年代とはまったく異なった共同体の見方を可能にしたのである。一見バラバラに見えた晩年のエコロジー研究と共同体研究は，ここでは，はっきりとつながっている。(『人新世』194)

斎藤氏によれば，マルクスが到達した，「持続可能性」と「平等」を兼ね備えた将来社会は「定常性」を原理とする共同体です。マルクスにおいては，共同体の発見と同時にエコロジーの覚醒があったのであり，その根底には共同体の定常性認識の獲得があったということです。マルクスは「ザスーリチへの手紙・草稿」において初めて「定常経済」としての共同体の再生という観点に立つことができたのです。定常性認識の獲得により，「進歩史観」の克服が可能になり，「生産力至上主義」と「ヨーロッパ中心主義」からの離脱も可能となったのです。ここで注目すべきは，「コミュニズムという歴史を作る力」として，『宣言』から『資本論』まで，マルクスは一貫してプロレタリアートという変革主体を措定していたのですが，斎藤氏はそれに変わって「共同体」がその力を持つと宣言していることです。唯物史観の根幹を覆しているのですから，マルクスの思想発展上での「大転換」というべきです。

「ザスーリチへの手紙・草稿」と「『共産党宣言』ロシア語第２版への序文」については，「マルクス・エンゲルスのロシア論」として，ロシアを初め，欧米でも多くの議論がなされました。日本でも1960・70年代には，多くの研究者によって論争がおこなわれました（和田［1975］)。そこでは，「最晩年のマルクスが，単線的な歴史観とヨーロッパ中心主義から決別していた」という見解も，さほど珍しいものではありませんでした。しかし，斎藤氏の主張のポイントはその先にあります。「共同体の再生」という道を，ロシアだけでなく，西欧諸国もまた目指すべきだと言うのです。『人新世』の結論は以下のようなものです。

引用16 西欧におけるコミュニズムの試みは，持続可能性と平等を重視する新しい合理性を打ち立てるために，共同体から定常型経済の原理を学び，それを取り入れないといけない，とマルクスは言っているのである。(『人新世』195)

大胆な結論であり，このようなマルクス像は，盟友エンゲルスも理解することができなかったとして(『人新世』197)，斎藤氏は自己の見解のオリジナリティを誇っています。

## ５．『人新世』でのマルクスの思想的転換：「認識論的断絶」

『人新世』の斎藤氏によれば，マルクス思想の展開は，３期に区分されますが，実質的には1968年以前の「壮年期マルクス」と1968年以降の「晩年マルクス」の２期です。この二つの時期の間の「断絶」は繋ぐことのできないもので，斎藤氏は，アルチュセールにならって，この裂け目を「認識論的切断」と呼んでいます（『人新世』196)。アルチュセールの場合，これは「疎外論的」マルクス解釈を批判するために用いられた用語でした。

アルチュセールや廣松渉が批判の対象としたのは，H・マルクーゼやH・ルフェーブル，日本の黒田寛一などの「疎外論的マルクス主義」でした。「疎外論的マルクス主義」は，「ソヴェト・マルクス主義」に反対して，『経済学・哲学手稿』などの初期マルクスに依拠して「人間主義的」な解釈をおこなったマルクス主義者の潮流でした。アルチュセールや廣松は，政治的には反ソヴェトの立場に立ちながら，初期マルクスの「疎外論」はマルクスの思想的成熟とともに克服されたことを論証して，「疎外論的マルクス主義」の文献的基礎を解体するというスタンスをとっていました。彼らは，「フォイエルバッハに関するテーゼ」（1845年）や『ドイツ・イデオロギー』（1846年）によって，マルクスの思想は初期と後期で「断絶」しているので，マルクスを継承しようとする者は，「疎外論」を克服した後期マルクスに依拠すべきだとしました。

個人の思想的発展がその内部に互いに対立する異質な諸側面を孕んでいることは一般的なことです。思想的発展につれて，この側面間の力点が変化し，関係づけも異なってきます。ある側面は拡大し主要なものとなり，他の側面は縮小し副次的なものとなり，消失する場合もあります。アルチュセール（Althusser［1965］）が提起した「認識論的切断」は，生きた思想の躍動するあり様を静態化し，異なった諸側面を，個人の思想発展の別個の段階に区分して，各側面の連続性を否定します。アルチュセールにおいては，初期マルクスにおける「疎外論」は『ドイツ・イデオロギー』以後の後期マルクスのなかでは死滅したものとして扱われます。しかし，実際には，後期マルクスのテキストのなかにも「疎外論」的な章句を見いだすことは容易です。アルチュセールの言う「切断」説は説得力を失います。このアポリアを突破するのが，バシュラール（Bachelard［1934］，［1938］）から借りた「兆候的読み方」というテキスト解読法です。これにより，テキストからお気に入りの章句のみを摘み取り，それに馴染まない章句を切り捨てることが可能になります。マルクスの思想的発展のなかから，アルチュセール自身の思想的立場に親和的な要素を集約し，それを「本来のマルクス」として造形して，それに同調しない要素を排除することが「兆候的読み方」です。「兆候的読み方」は，研究対象（マルクス）に自己の姿を投影し，浮かび上がった像のなかから自己の似姿を腑分けすることを意味していました。このような「読み方」は，宗教家や思想家が「聖典」を読むときにしばしば用いるもので，自らの思想と「聖典」と繋ぐことに成功する場合もありますが，多くの場合，自説の構築を妨げる場合もあります。自らの思想と研究対象との思想的一体化を避けるべき思想史研究者はこのような「読み方」をとるべきではないでしょう。研究対象たる思想家と自らの距離を前提として，研究対象を内在的に分析することこそ思想史研究の任務です。アルチュセールの場合，「兆候的読み方」は，思想史研究の方法としては失敗していて，思想的には自己破壊的なもので，アルチュセールの破綻もこの方法的錯乱の帰結と言えます（Althusser［1992］）。

『人新世』におけるマルクスのテキストの時期区分には，アルチュセール的な危険があります。「進歩史観」とエコロジーとが，両立不可能なものと捉えられ，1868年以前の「進歩史観」のマルクスは全否定されています。「進歩史観」に対抗する中核には「定常性」が据えられ，ここから「生産力至上主義」や「ヨーロッパ中心主義」に砲撃が浴びせられます。『人新世』において，1840年代のエコロジーが抹消されたのは，「認識論的切断」の結果だと言えましょう。

『大洪水』には，この様な頑な「認識論的切断」はありません。斎藤氏は「マルクスと自然の統一という1844年の洞察を『資本論』に至るまで堅持していた」と明言しています（『大洪水』51）。エコロジーは抽象的ではあるが楽観的な展望のなかで語られていました。その抽象性は，経済学および歴史と自然科学との研究のなかで徐々に払拭され，唯物史観はエコロジーの観点から深められ，豊富化されていったと捉えられています。晩年の共同体研究も，その延長線上にあるものだったと理解されていたのでしょう。

## 6.「疎外論」=「原点回帰の思想」と「唯物史観」=「進歩史観」

『大洪水』と『人新世』との違いで，見逃せないのは，『大洪水』で指摘されていた「疎外論」=エコロジーの『人新世』における消失です。

「疎外論」は，アルチュセールや廣松渉によって，初期マルクス的な発想で，マルクス主義以前の思考であると批判されましたが，マルクスの思想的生涯における一貫した通奏低音でした。「疎外論」は社会の現状に対して批判的な思想ですが，人間の歴史を本来の姿（「本来態」）からの逸脱・疎外・堕落の段階（「疎外態」）を経て本来の姿の復活（「回復態」）の３段階で捉え，現状を第２段階と見なして現状突破を呼びかける思想です。この様な発想は多くの宗教思想や革命思想に見られるものですが，西田照見は批判的な立場から，「疎外論」的発想を「原点回帰の思想」とか，「共同体憧憬」と呼んで，それがマルクスの生涯を通じて認められることを指摘しました（西田［1973］，［1975］，［1979］）。「本来態」→「疎外態」→「回復態」という３段階の歴史把握は，生産力の発展に応じて政治体制や人間精神の発展が見られるという「唯物史観」=「進歩史観」とは一見すれば水と油のように反撥し合うように思えますが，マルクスの思想的発展においては相補的な関係にあります。

「疎外論」的な「原点回帰」志向は，精緻で抽象的な思考を展開しますが，現状に対する批判とそれを克服する当為・願望を述べるにとどまり，経験的世界の実証分析へと進むことは稀です。1843年から翌年にかけて書かれた「ユダヤ人問題」，「ヘーゲル法哲学批判」，「経哲手稿」などは，そのような抽象的な思考の産物でした。『ドイツ・イデオロギー』をメルクマールとする唯物論的歴史把握（「唯物史観」）の形成は，経験的世界のなかに将来社会の契機を探究することによって，抽象的思考からの脱却を可能にし，社会科学への道を拓きました。その概要についてはマルクス自身によって，『経済学批判』の「序文」（Marx［1859］）にまとめられています。『資本論』を頂点とするマルクスの社会分析は，唯物史観を「導きの糸」としておこなわれた作業の成果であり，唯物史観は『資本論』によって，社会科学的な基礎づけを与えられます。マルクスの政治的見解を知るのに重要な，『共産党宣言』（1848年），『フランスにおける階級闘争』（1850年），「共産主義者同盟中央委員会の同盟員への呼びかけ」（1850年），『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』（1852年），『フランスの内乱』（1871年），「ゴータ綱領批判」（1875年）などの諸文献は，唯物史観の観点からの叙述と言えます。「唯物史観の定式」と言われる「『経済学批判』の序言」（1859年）においては，「導きの糸」としての唯物史観が簡潔にまとめられています。労働様式・生産様式の発展，生産諸力と生産諸関係=所有諸関係の矛盾，政治的次元での諸階級の闘争，それらから派生するイデオロギー的諸形態から，経験的な個々の事象の意味が明らかにされています。唯物史観は人間社会の森羅万象を解明する巨大な解釈体系であり，人間社会の動向は自然史的過程として理解され，抽象的な当為・願望の入り込む余地がないかのごとくです。「疎外論」は唯物史観によって「克服」されたかの印象を与えました。

「疎外論」と唯物史観とを截然と区別したうえで，それをマルクスの思想的発展段階のなかで位置づけしようとした試みが「認識論的切断」であったと言えるでしょう。しかし，マルクスのなかでは，「疎外論」と唯物史観は截然と「切断」されていたわけではありません。後期マルクスにおいても，「疎外論」は底流として生き続けました。『大洪水』が注目した「人間主義」=「自然主義」というエコロジーも生き残ったのです（引用８）。

「疎外論」的発想は，「本来態」→「疎外態」→「回復態」の３段階論の最終段階に関わって，唯物史観の中でも重要な役割を果たしています。将来社会を語るときにも，マルクスの論述には，「疎外された現状を突破するには，本来の姿を取り戻すべき変革が必要だという」というロジックが現れます。将来社会の到来の必然性（必要性）を論証することは，自然史的過程としての社会構成の移行というロジックだけ

では押しきれなかったのです。かくして唯物史観によって叙述された文献においても，現実批判に真実性を持たせる場面や将来社会への当為・願望を語る場面で，「本来態」→「疎外態」→「回復態」という疎外論的論理が現れます。疎外論はマルクス歴史認識の根柢をなし，唯物史観は発展動態の論理の解明を「導く」役割を果たしています。唯物史観は疎外論に支えられ，疎外論を内包していたのです。この相互依存が，マルクスの「強み」でもあり，マルクスの叙述に様々な「問題性」を招来する「難点」でもありました。

マルクスにおける共同体の問題は，「疎外論」＝「原点回帰の思想」＝「共同体への憧憬」という視角から見ると理解が容易になります。1844年当時のマルクスの議論は，近代社会において人びとが共同性（Gemeinwesen），類的本質（Gattungswesen）を奪われていることを告発し，その回復を目指すものでした。「人間主義」＝「自然主義」というエコロジーは，唯物史観の出発点だったのです。『大洪水』はそのことを正確に見抜いていますが，『人新世』においては，この点がまったく見失われてしまいます。『人新世』では，『パリ・ノート』の「疎外論」的なエコロジーは無視されています。「疎外論」＝「原点回帰の思想」＝「共同体への憧憬」は，『資本論』第１巻出版後に突然登場します。われわれは「疎外論」が底流として，1850～60年代のマルクスの叙述のなかに生きていることを知っていますし，『大洪水』の読者も1840年代のマルクスのなかにそれが息づいていたことを知っています。しかし，『人新世』の読者には，突然の出現なのです。『人新世』では，「進歩史観」と「疎外論」とは「認識論的に切断」されているので，エコロジーが突然現れるという印象を受けるのです。逆に唯物史観は「進歩史観」として，第３期以降では「克服」されてしまいます。字面の上では「生産力至上主義」が克服されるのですが，唯物史観＝「進歩史観」を否定することで，歴史発展の動力としての労働と生産の意義が見失われ，「生産力増大」のマルクス思想における意義をも否定することになってしまいます。プロレタリアートの権力獲得後の社会での生産力の増大も否定されることになります。

## ７．疑問点①：「ゴータ綱領批判」をめぐる「生産力増大」と「定常型経済」

『人新世』では，斎藤氏のエコロジー思想とマルクスのそれとが一致していることを示す目的で，マルクスの章句に斎藤氏流の解釈を与えている箇所が散見されます。特に疑問のある点について記してみます。まず，「ゴータ綱領批判」の解釈についてです。

「ゴータ綱領批判」は，「革命後の社会」についてのマルクスの構想を知るうえで重要な文献です。マルクスは「共産主義」社会を「第１段階」＝「労働に応じた分配」と「第２段階」＝「必要に応じた分配の２段階に分けています。斎藤氏は「共産主義の第２段階」についてのマルクスの記述に着目しています。

> 引用17 共産主義社会のより高度な段階で，すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり，それとともに精神労働と肉体労働の対立がなくなったのち，労働が単に生活のための手段であるだけでなく，労働そのものが第一の生活欲求となったのち，個人の全面的な発達にともなって，またその生産力も増大し，協同的富のあらゆる泉が一層豊かに湧きでるようになったのち――そのとき初めてブルジョア的権利の狭い限界を完全に踏みこえることができ，社会はその旗の上にこう書くことができる――各人はその能力におうじて，各人はその必要におうじて！
>
> （『全集』19，21，『人新世』201，下線は太田）

この一節についての斎藤氏の解説は，以下の様なものです。

引用18 この一節全体の意味するところは，コミュニズムによる社会的共同性は，マルク協同体的な富の管理方法をモデルにして，西欧においても再構築されるべきだということではないか。それは要するに定常型経済の原理のことであり，この原理こそが，湧きでるような富の潤沢さを実現するというのである。（『人新世』202）

マルクスによれば，「共産主義の第２段階」は「共同的富のあらゆる泉が豊かに湧きでるようになった状態」で，これは基本的にフーリエ（Fourier）などの「ユートピア社会主義者」と同様の「絵空言」です。よく言っても，遥か彼方の将来の目標です（太田［2013］）。「共産主義の第１段階」から「第２段階」（本来の「共産主義」）への進行にとって，生産力の増大が不可欠なものであるとマルクスが認識していたことを否定することはできません。「第２段階」を「定常型経済」と呼び，「脱成長的コミュニズム」と呼ぶことは可能かも知れません。しかし，「第１段階」から「第２段階」への遙かなる道程においては「脱成長」は実現せず，生産力の増大に励まなければならないでしょう。サイードの言う「生産力至上主義」は，ここにこそ妥当するでしょう。J・S・ミルの「停止状態」が，消費水準の抑制をも含めて，デメリットを考慮したうえで提起されている（Mill［1848］）のと比較すると，マルクスの「共産主義第２段階」論の超楽観主義・非現実性は明らかでしょう（武田［2017］）。『人新世』では，その様な問題点はまったく考えに入れられていません。

ついでながら，「ゴータ綱領批判」におけるマルクスの「アソシアシオン構想」については，国分幸の綿密な分析（国分［1998］，［2016］）によって，アソシアシオン社会が容易に「オリエンタル・ディスポティズム」に転化することが，論証されています。「気候毛沢東主義」を批判する斎藤氏（『人新世』113）にとっても見逃すことのできない論点です。

## ８．疑問点②：「否定の否定」と〈コモンとしての占有〉（共同占有）

第２の疑問点は，『資本論』第１巻の「本源的蓄積」章の章句に関するものです。斎藤氏は，マルクスの記述が，自らの主張と内容的に一致していると述べています。この点について吟味してみましょう。原文と斎藤氏の訳文を引用してみます。

引用19 Diese stellt nicht das Privateigentum wieder her, wohl aber das individuelle Eigentum auf Grundlage der Errungenschaft der kapitalistischen Ära: der Kooperation und des Gemeinbesitzes der Erde und der durch die Arbeit selbst produzierten Produktionsmittel.（*MEW*, Bd. 23b, 791）

この否定の否定は，生産者の私的所有を再建することはせず，資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有をつくりだす（再建する）。すなわち，協業と，地球（土地）と労働とによって生産された生産手段をコモンとして占有（共同占有）することを基礎とする個人的所有をつくりだすのである。（『全集』23b，995，訳文は『人新世』143，下線部は太田が付加）

斎藤氏は，ここでのマルクスの叙述について以下のように説明します。

引用20 一段目の「否定」は，生産者たちが〈コモン〉としての生産手段から切り離され，資本家の下で働かなければならなくなったことを示している。だが二段目の「否定」（「否定の否定」）に

おいては，労働者たちが資本家による独占を解体する。そして，地球と生産手段を〈コモン〉として取り戻すということである。‥‥マルクスの主張は明快である。コミュニズムは，無限の価値増殖を求めて地球を荒廃させる資本を打倒する。そして，地球全体を〈コモン〉として，みんなで管理しようというのである。(『人新世』143-144)

斎藤氏は通例「共同占有」と訳されるGemeinbesitzに対して「コモンとして占有すること」という訳語をあてています。この翻訳は意味深長です。斎藤氏の解釈に従うと，「第１の否定」は生産者からの〈コモン〉としての生産手段の剥奪，「第２の否定」は生産者による〈コモン〉の奪回ということになります。第１の否定以前を「状態１」とすると，それは生産者たちが生産手段を〈コモン〉として所有していた社会＝「共同体」を意味することになり，第１の否定と第２のそれの間の「状態２」は「資本主義」を意味し，第２の否定以後の「状態３」は「将来社会」ということを意味することになります。このように解釈すると，「状態１」は〈コモン〉としての生産手段と生産者たちが結合した状態，「状態」２は〈コモン〉と生産者たちが引き離された状態，「状態３」は〈コモン〉と生産者たちが再結合する状態で，歴史は，「本来態」（状態１）→「疎外態」（状態２）→「回復態」（状態３）という「疎外論」的３段階論にスッキリとおさめられます。このようなロジックは，「経哲手稿」以来のマルクスのなかにしばしばみられるものです。しかし，「共同体」→「共同体」の喪失→「共同体」の回復と言う３段階論は，引用19 の「否定の否定」論における歴史認識とは異質なものです。

引用19 の直前で，『資本論』のマルクスは次の様に述べています。原文と大月版『マルクス・エンゲルス全集』の訳文を以下に掲げてみます。

引用21 Die aus der kapitalistischen Produktionsweise hervorgehende kapitalistische Aneigungswseise, daher das kapitalistische Privateigentum, ist die erste Negation des individuellen, auf eigne Arbeit gegründeten Privateigentums. Aber die kapitalistische Produktion erzeugt mit der Notwendigkeit eines Naturprozesses ihre eigne Nation. Es ist Negation der Negation.（*MEW*, Bd. 23b, 791）

資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は，したがってまた資本主義的私的所有も，自分の労働にもとづく個人的な私的所有の第１の否定である。しかし，資本主義的生産は，一つの自然過程の必然性を持って，それ自身の否定を生み出す。それは否定の否定である。(『全集』23b, 995)

マルクスの主張を 引用21 から 引用19 という順序で読んでみると，「状態１」は「自分の労働に基づく私的所有」の社会であり，「共同体」ではありません，「状態２」は資本主義，「状態３」は将来社会を意味しています。「第１の否定」は私的所有者である小生産者が，生産手段および土地から強制的に切り離されることを意味し，否定されるのは私的所有であって，〈コモン〉ではありません。「状態１」には共同占有は存在せず，〈コモン〉も存在しないのです。「共同占有」は「状態２」の資本主義のもとで出現するのであって，未だ出現していないものを否定することはないのです。「第２の否定」は，資本主義的私的所有を否定しますが，個人的私的所有を再建するのではなく，資本主義時代の成果である協業と共同占有の上に個人的所有を再建するという意味です。ここで言われている「個人的所有の再建」については，デューリング以来の批判と反論および研究史上の論争とがあるわけですが，「状態１」の段階は，共同占有Gemeinbesitzの世界ではないということは確認できます。

「状態１」の小生産者の段階には，共同占有は存在しません。小生産者は，資本主義以前の社会に様々な形で散在しているので，共同体の構成員である場合もあるかも知れませんが，マルクスは「個人的な私的所有」としての側面から歴史的位置づけをおこなっているので，「状態１」では共同占有が問題にされることはありません。〈コモン〉をめぐる「本来態」（状態１）→「疎外態」（状態２）→「回復態」（状態３）という「疎外論」的３段階論はここでは問題になりません。ここでの共同占有の取り扱いは，「進歩史観」的であり，「疎外論」＝「原点回帰の思想」＝「共同体への憧憬」の姿を見いだすことはできません。

マルクスにおいて共同占有Gemeinbesitzは労働のあり方に関わる用語で，「労働の社会化」と密接に関わるものです。「本源的蓄積」の章では，「否定の否定」についての叙述に先立って，「労働の社会化」について次の様に述べられています。

> 引用22 自分の労働によって得た，いわば個々独立の労働個体とその労働諸条件との癒合にもとづく私的所有 Privateigentumは，他人の労働ではあるが形式的には自由な労働の搾取にもとづく資本主義的私的所有によって，駆逐されるのである。／この転化過程が古い社会を深さから見ても広がりから見ても十分に分解してしまい，労働者がプロレタリアに転化され，彼らの労働条件が資本に転化され，資本主義的生産様式が自分の足で立つようになれば，それから先の労働の社会化Vergesellschaftung der Arbeitも，それから先の土地やその他の生産手段の社会的に利用される生産手段すなわち共同的生産手段への転化も，したがってまたそれから先の私有者の収奪も，一つの新しい形態をとるようになる。今度収奪されるのは，もはや自分で営業する労働者ではなくて，多くの労働者を搾取する資本家である。（『全集』23，994，ドイツ語は太田による付加）

「労働の社会化」は資本主義のもとで進展するものであって，資本主義のもとでの労働と生産のあり方の変化を示す唯物史観的＝「進歩史観」的な概念です。この概念が「共同占有」Gemeinbesitzと言う概念と密接な関わりを持つことを見逃すべきではありません。

## ９．「ザスーリチへの手紙・草稿」再訪

『人新世』のマルクス論のポイントは「ザスーリチの手紙・草稿」の理解にあります。最後に，変革主体論という観点から，斎藤氏のマルクス論をもう一度振り返ってみよう。

引用14 とそれについての解説 引用15 において，「コミュニズムという歴史を作る力」としてマルクスが措定していたプロレタリアートという変革主体に変わって，斎藤氏は共同体社会の「定常性」を据えたのですが，いかにして「定常性」が「資本の力を打ち破って」，生産力が増大し協同的富のあらゆる泉が一層豊かに湧きでるようになった「コミュニズム」を「打ち立て」ることができるのか，理解することは容易ではありません。

「ザスーリチの手紙・草稿」の意義については，MEGAおよびマウラーの著書（Maurer［1854］）を詳細に検討した平子友長（平子［2019］，［2020］）によって，「否定の否定」問題との関連でより精密に展開されています。

> 引用23 資本主義の克服の道筋の中に私的所有の止揚（西ヨーロッパ）と（共同体）の「自生的発展」（それ以外の諸地域）の両者が組み込まれることによって，資本主義止揚後の社会システムの基本規定は「自分の労働に基づく私的所有」の「否定の否定」としての「個人的所有の再建」（『資本論』

第１巻）から「最もアルカイックな類型のより高次の形態である集団的な生産および領有への復帰」（MEGA I/25：228），「アルカイックな社会類型のより高次の形態での復活」（MEGA I/25：220）へと変更された。人類史の起点は私的所有にではなく「農業共同体」に据えなおされた（平子［2019］116）。

平子の場合，『資本論』では資本主義発展の起点が「自己労働に基づく私的所有」の社会だったことが確認されています。この点は斎藤氏のマルクス理解よりも正確で，共同体の「定常性」こそがコミュニズム樹立の動力であるという不可解な見解も平子には見られません。しかし，マルクスにおいてロシアの共同体が生き延びてコミュニズム樹立の起点になることを認めるということと，人類史認識が革新されて，ロシア型の発展コースが「本流」で，西欧型のそれが「傍流」と認識するようになったことを意味するものではありません。平子の理解にも「認識論的切断」の傾向が見られるのです。

唯物史観とは，革命の変革主体という観点から見れば，プロレタリアートという社会階級が何故人類史の前史を終わらせる資格と力量を持つのかということを解明する理論ともいうべきものです。マルクスの社会変革論において，プロレタリアートの特権的な地位は，唯物史観の確立以前の文献，例えば「ヘーゲル法哲学批判序説」などにもはっきりと明示されています。そこでは，プロレタリアートが「人間の完全な喪失であり，したがってただ人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとることのできる」（Marx［1844a］427）存在であることが指摘され，その特権的な地位が根拠づけられています。『共産党宣言』では，「今日ブルジョアジーに対立している全ての階級のうちで，プロレタリアートだけが真に革命的な階級である。その他の階級は，大工業の発展とともに衰え，没落する。プロレタリアートは大工業の特有の産物である」（Marx & Engels［1848］485）ことが力説されています。『資本論』で登場する生産的階級はプロレタリアートだけであり，彼らは大工業のもとで将来社会の管理能力を陶冶し，「いろいろな社会的機能を自分のいろいろな活動様式としてかわるがわるおこなうような全体的に発達した個人」（Marx［1867］634）となるとされています。大工業の生み出すプロレタリアートなくしては，将来社会は考えられません。このような主体を欠いた西欧以外の共同体で可能なコミュニズムとは如何なるものでしょうか。変革主体論からみるとマルクスは断固たる「進歩史観」で，「ヨーロッパ中心主義」です。

MEGAに含まれる草稿やノートを丹念に検討し，通説的な唯物史観から「はみ出した」章句を見いだすことは可能でしょうし，その意味を吟味することはマルクス研究にとって重要です。しかし，「はみ出した」章句が，通説を覆す埋もれたパラダイムの露出部分なのか，通説的パラダイムの補完物なのか，通説的パラダイムからの単なる「はみ出し」なのか，少なくとも埋もれたパラダイムを語るのなら，新発見のパラダイムの断片ではなく体系の輪郭を提示すべきでしょう。マルクスの思想全体の流れを見ると，唯物史観＝「進歩史観」の著作は「主流」の地位を占め，「疎外論」＝「原点回帰の思想」＝「共同体への憧憬」は「傍流」に留まったように思われます。マルクスにおいて，「疎外論」的人類史構想が大工業の陶冶するプロレタリアートに代わる変革主体を提示しえていたことを論証することができない限り，唯物史観＝「進歩主義」路線の放棄は主張できないでしょう。

マルクスのロシア社会研究は，1860年代以来のダニエリソンなどとの交流を通じて，またマルクス自身のロシア語の習得によって，相当のレベルに達していたことは確かです。ロシアにおける農村共同体に関する論争は，1850年代以後チチェーリンを中心とするスラヴ派とベリャーエフを中心とする西欧派との間で活発に展開されたが（ズィリャーノフ［1995］），マルクスが依拠しようとした文献は，スラヴ派の流れのなかにあったナロードニキの系統の論者たちでした。マルクスは，ナロードニキのカリスマであるチェルヌィシェフスキーを非常に高く評価しました。1870年代にナロードニキ運動が行き詰まり，ナロードニ

キの組織「土地と自由」の分裂後，テロルによって専制政府を打倒しようとする「人民の意志」党が結成されますが，この党は「共同体の再生」による社会主義を目指していました。マルクスとエンゲルスはこの党を熱烈に支持しました。「人民の意志」党は1881年３月に皇帝アレクサンドル２世の暗殺に成功しますが，その後の弾圧によって壊滅します。「人民の意志」党に対する反対者派で，「西欧派」的発想に傾きつつあった「土地総割替」派のザスーリチがマルクスに手紙を書いたのは，同年２月のことでした。「人民の意志」党と「土地総割替」派の対立のなかでマルクスが「人民の意志」党よりの見解をとっていたので，「共同体」再生の可能性を過大評価したとの説も否定し難いものがありますが，マルクスの革命思想における変革主体＝プロレタリアート論の重要性を考えると，晩年のマルクスのロシア共同体への思い入れは，「疎外論」＝「原点回帰の思想」＝「共同体への憧憬」の噴出と考えるべきだと思われます。思想史研究においては，「認識論的切断」への誘惑を断ち切って，唯物史観と「疎外論」との矛盾に満ちた絡み合いをほぐしていくなかで，マルクスの生きた思想の全体を捉えることこそ肝要です。

『人新世』は，エコロジー問題についての斎藤氏の思想を開陳したものであるから，その点についても批評すべきであるかもしれませんが，本日は世話人の両氏の依頼に沿って，氏のマルクス理解に絞ってお話しさせていただきました。

《参　考　文　献》


Althusser, L.［1965］*Pour Marx*, F. Maspero. 河野健二・田村淑訳『甦るマルクス』人文書院，1968.

Althusser, L.［1992］*L'avenir dure lontemps suivi de Les faits*, édition établie et présentée par Olivier Corpet et Yann Moulier Boutang. 宮林寛訳『未来は長く続く：アルチュセール自伝』河出書房新社，2002.

Bachelard, G.［1934］*Le nouvel esprit scientifique*, Felix Arcan. 関根克彦訳『新しい科学的精神』ちくま学芸文庫，2002.

Bachelard, G.［1938］*La formation de l'esprit scientifique: contribution à une psychanalyse de la connaissance objective*, J. Vrin. 及川馥訳『科学的精神の形成：対象認識の精神分析のために』平凡社，2012.

Bergmam, J.［1983］Vera Zasulich: A Biography, Stanford U.P. 和田あき子訳『ヴェーラ・ザスーリチ：ロシア女性革命家の生涯』三嶺書房，1986.

Foster, J. B.［2000］*Marx's Ecology: Materialism and Nature*, Monthly Review Press. 渡辺景子訳『マルクスのエコロジー』こぶし書房，2004.

Fourier, Ch.［1808］*Théorie des quatre mouvemens et des destinées générales: prospectus et annonce de la découverte*, Mathieu Rusand. 巖谷國士訳『四運動の理論』（上）・（下），1970.

廣松渉［1968］『マルクス主義の成立過程』至誠堂.

廣松渉［1982］『存在と意味：事的世界観の定礎　第１巻』岩波書店.

廣松渉［1993］『存在と意味：事的世界観の定礎　第２巻』岩波書店.

国分幸［1998］『ディスポティズムとアソシオン構想』世界書院.

国分幸［2016］『マルクスの社会主義と非政治的国家：一大協同組合から多元的連合社会へ』ロゴス.

Marx, K.［1844a］「ヘーゲル法哲学批判 序説」，『マルクス・エンゲルス全集』第１巻.

Marx, K.［1844b］「経済学・哲学手稿」，『マルクス・エンゲルス全集』第40巻.

Marx, K.［1859］「『経済学批判』序文」，『マルクス・エンゲルス全集』第13巻.

Marx, K.［1867］『資本論』第１巻，『マルクス・エンゲルス全集』第23巻.

Marx, K.［1868］「エンゲルスへの手紙 ３月14日」，『全集』第32巻.

Marx, K.［1875］「ゴータ綱領批判」，『全集』第19巻.

Marx, K.［1881a］「ベーラ・ザスーリチの手紙への回答の下書き」，『全集』第19巻.

Marx, K.［1881b］「ベーラ・ザスーリチへの手紙 ３月８日」，『全集』第19巻.

Marx, K. & Engels, F.［1848］『共産党宣言』，『全集』第４巻.

Marx, K. & Engels, F.［1850］「一九五〇年三月の共産主義者同盟中央委員会の同盟員への呼びかけ」，『全集』第７巻.

Marx, K. & Engels, F.［1882］「『共産党宣言』ロシア語第２版への序文」，『全集』第19巻.

Maurer, G. L. v.［1854］*Einleitung zur Geschichte der Mark-, Hof-, Dorf- und Stadt-Verfassung und der öffentlichen Gewalt*, München: Kaiser.

Mill, J. S.［1848］*Principles of political economy: with some of their applications to social philosophy*, John W. Parker. 末永茂喜訳『経

済学原理』岩波文庫，1959-63.
西田照見［1973］マルクス主義における終末論的発想,『思想』593.
西田照見［1975］「原点回帰」の思想構造：「共同体」憧憬への批判（上）・（下），『思想』613，614.
西田照見［1979］『マルクス思想の限境：エコロジー時代の社会思想』新評論.
太田仁樹［2003］マルクス主義理論史研究の課題（XII）：植村邦彦著『マルクスを読む』によせて,『岡山大学経済学部雑誌』34（4），（太田［2015］第８章）.
太田仁樹［2013］『ゴータ綱領批判』（1875年）：マルクス未来社会論とドイツ労働運動」，『季報唯物論研究』124，（太田［2015］付論１）.
太田仁樹［2015］『論戦マルクス主義理論史研究』御茶の水書房.
Said, E. W.［1978］Orientalism, Pantheon Books．今沢紀子訳『オリエンタリズム』（上）・（下）平凡社，1993.
Saito, K.［2017］*Karl Marx's ecosocialism: capitalism, nature, and the unfinished critique of political economy,* Monthly Review Press.
斎藤幸平［2019］『大洪水の前に：マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版.
斎藤幸平［2020］『人新世の「資本論」』集英社新書.
崎山政毅［2021］〈書評〉斎藤幸平『大洪水の前に：マルクスと惑星の物質代謝』，『社会思想史研究』45.
杉浦秀一［1995］ズィリャーノフ氏の論文「ロシア農村共同体に関する一世紀半の論争」に対する若干の疑問,『ロシア史研究』58.
平子友長［2019］望月清司氏のマルクス市民社会論批判（上），『季報唯物論研究』149.
平子友長［2020］望月清司氏のマルクス市民社会論批判（下），『季報唯物論研究』152.
武田信照［2017］『ミル・マルクス・現代』ロゴス.
武田信照［2021］〈書評〉斎藤幸平著『人新世の「資本論」』，『季報唯物論研究』155.
植村邦彦［2001］『マルクスを読む』青土社.
和田春樹［1975］『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』勁草書房.
ズィリャーノフ（Зырянов, П.）［1995］ロシア農村共同体に関する一世紀半の論争，『ロシア史研究』57.